

# 國學院大學學術情報リポジトリ

初期大江健三郎試論：  
戦後再啓蒙・自己啓蒙・文化批評の様相

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 王, 新新 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00001590">https://doi.org/10.57529/00001590</a>

# 初期大江健三郎試論

—戦後再啓蒙・自己啓蒙・文化批評の様相—

**Tentative Discussion of Kenzaburō Ōe's Early Literary Works:**  
From the Perspective of Re-enlightenment, Self-enlightenment and Cultural  
Criticism after the Second World War

王 新新

## はじめに

大江健三郎は50年代の後半から文学創作に携わって以来、現在もなおその創作活動を継続している。大江文学の主題や作風は絶えず変化しつつあると一般的に認められているが、大江健三郎の六十年余りの文学活動を考察してみると、大江健三郎は、最初の十年、即ち処女作「奇妙な仕事」が発表される1957年から大作『万延元年のフットボール』が発表される1967年までの十年間に、文壇に登場し、自分の表現方法を模索したが一度挫折し、そしてその挫折から立ち直り、独特の文学方向を確立し、独特の文学理念や方法を形成するという道程を辿ってきた。その後の主題や作風がどのように変わっていても、この時期に確立した文学の方向性を根本的に変えることはなかった。

作家について解釈・研究する時に依拠すべきテキストは二つあると思う。一つは作家が文字によって遺した全部のもの、即ち作家が書いた小説・詩歌・随筆・演説・対談・書簡などすべてのものである。もう一つはそれらの文字テキストの創造主体である作家本人と関連する知人や友人の証言である。本研究は、この二つの面から資料を収集して、一中国人の日本文学研究者の問題意識を持って、大江文学を解読しようと試みた。また本研究は、初期の大江文学に関する考察を通して、現代の中国文学に示唆を与える点を指摘し、それによって、中国における大江文学の誤読を正し、日本の大江研究に欠けている部分を補足しようとするのが目的である。

これまで日本では、大江の初期文学について、すでに多くの作家論・作品論が発表されている。1950年文壇に登場してから、大江の文学は、まずは大物の評

論者たちが名付け、それから多くの評者や読者に「継承」されてきた多くのキーワードによって語られてきた。たとえば1960、70年代は「戦後文学の後継者」、「戦後民主主義」、「政治と性」、「想像力」、「核時代の危機」などであり、80年代に入ると、それは「森と救済」、「障害児との共生」、「文学の方法化」などになっている。もし史的に大江初期文学の評論や研究をまとめてみれば、以下のように区分できる。

文壇に登場してからすぐ、荒正人、平野謙らの評論家に注目されたが、60年代前半までの時期は、大江とその作品を単独で取り上げる評論はまだ見かけられず、石原慎太郎や開高健と共に新しい世代を代表する小説家とし、それまでになかった新風を吹き込んだ存在として論じるものが多かった。その際、〈監禁状態〉や〈イメージ〉という言葉がキーワードとして多用され、その感覚・感受性の独特さが特に注目されていた<sup>(1)</sup>。また、作中世界が現実日本の日常生活と切り離されて隠喩的であるという見方もあった<sup>(2)</sup>。

60年代前半に入ると、『遅れてきた青年』や『日常生活の冒険』といった連載長編が相次いで書かれた大江に対する特殊な新人扱いは一段落し、文壇の反応も落ち着きを取り戻したようである。「われらの時代」を発表してから、評論界からも読者からもそれまでにない厳しい批判を浴びるようになった。それに反論するために、大江はいくつかのエッセイを書いたが、〈性〉や〈政治と性〉など、大江が自作を自評する際に使った言葉は、評者たちもそのまま使うようになった。

60年代後半になって、『個人的な体験』、『万延元年のフットボール』が発表され、特に全エッセイ集『厳粛な綱渡り』及び『大江健三郎全作品』全六巻が刊行されることによって、それまでの仕事を全体として把握することが可能になるにつれて、まとまった大江論が現れ始めた<sup>(3)</sup>、学術誌も大江特集を出すようになった<sup>(4)</sup>。さらに大江は社会的、政治的発言が多いため、より一層批評の対象となる

---

(1) 詳しくは江藤淳「新しい作家たち」(『群像』1958年2月号)、野間宏「方法の問題」(『群像』1958年7月号)、中田耕治「芸芸時評」(『近代文学』1958年8月号)などを参照。

(2) 例えば加藤周一・中村真一郎による「創作合評・『飼育』」(『群像』1958年2月号)、小田切秀雄「創作合評・『芽むしり仔撃ち』」(『群像』1958年7月号)など。特に奥野健男は、『日本文学の病状』(五月書房、1959年)において、「現実遊離派」という呼び名もした。

(3) 最初の大江論の単行本として刊行された松原新一の『大江健三郎の世界』(講談社、1967年)などがその代表である。

(4) 例えば1968年2月号の『三田文学』は「特集・大江健三郎」、1967年9月号の『国文学 解釈と鑑賞』は「特集・戦後世代の文学——安部公房・大江健三郎・吉本隆明——」、1971年1月

ことが多くなった。

日本において大江健三郎に関する賛否両論が激しく対立しているのに対して、中国において、大江はノーベル文学賞受賞によってはじめてその名前が注目されて研究されてきたと言っても過言ではない。川端康成、三島由紀夫、村上春樹などの作品のほとんどが中国語に翻訳されているが、大江は60年代にわずか二、三の短篇が翻訳されていたに過ぎなかった<sup>(5)</sup>。大江の作品が再び翻訳されたのは、ノーベル賞受賞以後のことである。学術書の出版で知られる光明日報出版社が、1995年5月に『大江健三郎作品集』（全五巻）を刊行すると、1996年4月と1997年12月に、文芸書を専門とする作家出版社と漓江出版社もそれぞれ『大江健三郎作品』（全三巻）と『ノーベル文学賞受賞作家作品集・大江健三郎』を刊行した。ノーベル賞受賞による第一次大江ブームの後、2000年の秋、大江の三回目の中国訪問によって、第二次大江ブームが起これると、『世界文学』、『外国文学動態』によって雑誌特集が生まれ、光明日報出版社や河北教育出版社からも大江健三郎自選集が出た。

作品が翻訳されるにつれて、大江文学の評論や研究も盛んになってきた。近年、多元的な研究成果も見られるようになったが、大江の初期文学に関しては、やはり「民主主義作家」、「反天皇制作家」、「実存主義作家」などというレッテルを貼り付けることが多いようである。それはやはり中国古来の文学理念として「文以載道」<sup>(6)</sup>という考え方が支配的な地位を占めていることに由来すると考えられる。もちろん時代の変遷によって「道」の意味合いはある程度変わるにせよ、中国文学全体の流れをみれば、「文以載道」の文学観が根本的に揺らぐことはなく、知識人の共通理解になっていると言ってよい。こうした前提に基づいて外来文学を見るなら、政治的、社会的発言の多い大江健三郎が中国で高く評価されたのも当然であろう。しかし、大江健三郎の最初の十年を見てみれば分かるように、大江の文学と中国伝統の「文以載道」との最大の相違点は、それが個人を犠牲することを代価にするのではなく、かえって個人・自我に相当程度注目したところに

---

号の『国文学 解釈と教材の研究』は「特集・江藤淳と大江健三郎」、1971年8月号の『国文学 解釈と鑑賞』は「特集・七〇年代の政治と性——大江健三郎」、1974年3月号の『ユリイカ』は「特集・大江健三郎:その神話的世界」など。

- (5) 1960年第三回日本文学代表団の中国訪問を前にして、外国文学を翻訳紹介する中国の専門誌『世界文学』は特集を出した。そのうち、大江の「奇妙な仕事」、「死者の奢り」が選ばれた。  
 (6) 文章を以てて道を担う、つまり文章は道理を述べて考えを表現するものであるという意。

あるのではないだろうか。だとすれば、この点について、中国の日本文学研究界においては明らかな注意不足、ないし誤読が存在している。90年代に入ってから、中国文学におけるアイデンティティの問題がますます際立ってきて、「文以載道」とまったく逆方向の「個人化創作」の傾向もますます明らかになってきた。このような状況の中で、大江健三郎はどのように個人と社会との関係を捉えているのか、文学は作家にとって一体どのようなものであるべきか、といった問題について考察していくことは、中国の現代文学に示唆を与え、とつても意義のあることである。

大江健三郎が一体どのような存在として日本文壇・日本社会に現れてきたのかを考察する際、大江特有の啓蒙意識と文化批評意識というのがキーワードであると思う。説明しておかなければならないが、ここで言う啓蒙は、いわゆる啓蒙主義運動とは関係がなく、ただ大江健三郎の思想を表すために、筆者が仮に用いる言葉である。「戦後」という社会転換期において、大衆がまだ新しい社会形態を十分に理解できていない時期に、啓蒙者が必要となる。敗戦後の数年間に、軍国主義を批判し、戦争責任を問ひ、民主主義思想の普及を進めようとする戦後啓蒙の動きがあった。一般的に言えば、戦後啓蒙運動は1950年に終結したと考えられるが、本稿は大江を戦後啓蒙運動の中で考察する意図はないが、「啓蒙」をいう言葉を選んだのは、その文学が明らかな戦後啓蒙の特徴を帯びているからである。戦後啓蒙運動に対して、大江文学の啓蒙は「再啓蒙」と言ってよいだろう。

## 一 啓蒙意識の露頭

もし「社会文学」と「個人文学」との関係という角度から見れば、文学史は実際、「社会文学」と「個人文学」が同時に併存するが、交替に主流の地位を占める過程でもある。ここでいう「社会文学」というのは、人間が客観世界外部世界及び他人との関係についての認識や思考、つまり人間の社会意識を表現するのを主な目標にする文学であり、「個人文学」というのは、人間が自分自身に対する自覚や認識・思考、つまり人間の自己意識を表現するのを主な目標にする文学である。両者は常に融合し合っており、截然と分けることはできず、それぞれの分量を測定することや両者の間にはっきりとした一線を画すことが難しいし、交替に文学の発展を担い、文学の潮流をリードしている。

以上のような考え方によって明治維新以来の日本文学史を考えれば、その主流はまさに「個人文学」から出発して、だんだん「社会文学」に変化し、そしてまたもう一度「個人文学」に回帰したというような発展の様相を呈している——明治時代は「個人文学」の時代、大正時代は「個人文学」が「社会文学」へ変化する過渡期、大正後期から昭和10年前後までは「社会文学」が文壇に君臨し主流となった時期であるが、「社会文学」の代表としてプロレタリア文学運動が鎮圧され破滅した後、「個人文学」だけが存在しえたような状態である。敗戦後はさらに「個人文学」の天下となったのである。

第二次世界大戦以後、「個人文学」への回帰というグローバルな趨勢の中、戦後の日本文学は戦争を反省し、社会的意義のある作品を大量に生み出すと同時に、明らかに「個人文学」への回帰の傾向が見られる。ただし、この時期の「個人文学」は明治期のそれと比べれば、個人が存在する社会と時代に関する意識がもっと強く、個人と社会についての認識ももっと深くて幅広いものだといえる。大江健三郎は、正にそのような文学状況の中で日本文壇に登場したのである。

大江健三郎の処女作は「奇妙な仕事」だと一般的に思われているが、彼にとって活字になった最初の作品は「火山」<sup>(7)</sup>である。この小説は1955年7月の前半に書かれたと想定できるが、この年の5、6月に、都下砂川町で行なわれていた基地反対闘争、即ち砂川闘争が、当時学生運動の最大の問題であった。さらに7月2日、農民・労働者・学生と警察隊・調達測量隊との激突事件もあった。「火山」における反基地闘争は、砂川闘争の投影であるとも推定できるであろう。要するに、創作活動に携わった最初の時から、大江は、時代的痕跡を色濃く帯びている。この小説は行動と無為の対立を主題にしているが、その後の「見る前に跳べ」や「われらの時代」など一連の同じ主題の小説と大差がある。「火山」における〈僕〉の無為は、まったく個人レベルの〈僕〉独自のものであり、その後の作品のようにそれを世代共通の社会現象として捉えられているものではない。この意味で言えば、「火山」はあくまでも自己と社会との関係における自己を表現しようとする作品であると言わねばならない。

「火山」が掲載された二年後、即ち1957年、大江健三郎は「奇妙な仕事」を以っ

---

(7) 東京大学教養学部学友会の機関誌である『学園』1955年9月号に掲載。この年、『学園』が『東京大学新聞』に先がけて、「銀杏並木賞」という学生小説コンクールを創設し、当時学部二年の大江はこの作品で第一席なしの第二席に入選した。

て東大五月祭に応募し受賞したことによって、文壇の大手評論家に注目されるようになった。1958年3月、大江健三郎の第一の短編集『死者の奢り』が刊行され、その「後記」に「監禁されている状態、閉ざされた壁のなかに生きる状態を考えると、一貫した僕の主題でした」と書かれたため、〈監禁状態〉という言葉がそのままこの時期の大江健三郎を理解するキーワードになってしまう。当時の評論をまとめてみると分かるように、〈監禁状態〉について、主に実存主義の影響・日本の被占領・戦後革命の終焉における青年たちの虚無的心情という三つの要因が挙げられてきたが、しかし、角度を変えてみれば、それは一種の〈疎外状態〉であるともいえる。特に注意しなければならないのは、小説の主人公が一樣に〈僕〉に設定され、そして〈僕〉は常に〈僕ら〉、〈僕ら日本の青年〉という世代の名のもとで発言していることである。これは、敗戦直後に青年期を迎えた大江健三郎にとって、同時代を相対化するための戦略であると考えられる。つまり、〈僕〉という個人に〈現代日本の青年〉という世代の象徴を託すことによって、大江健三郎は、個人的な無為を社会的現象として、若い世代全体に共通した問題として捉え、1950年代という〈われらの時代〉は絶望と行動不能の時代であると表現している。当時の評論や同時代の人たちの記憶によると、登場時の大江は日本文壇に強い衝撃をもたらし、新風を吹きこんだ存在だったようだ。このような時代把握と表現法が同時に活躍していた他の作家たちのものとはかなり異なるからであろう。

このような仕掛けが繰り返し採用されるのは一体何を物語っているのかについて考える場合、政治にまったく無関心な主人公たちと政治に積極的な関心を示した大江自身の間の落差が存在することに注目できる。これは「日本の学生の消極的、否定的側面」<sup>(8)</sup>を強調するためだとも考えられるが、〈僕ら日本の青年〉が〈監禁状態〉の下で次第に敵意を失い、外部と抵抗する意識を失ってしまうという設定と考え合わせると、大江健三郎の深意はこれだけに止まらないと思われる。

1956年9月、大江健三郎は東大学生演劇のために「獣たちの声」という脚本を書いた。「奇妙な仕事」はその脚本が小説化されたものである。1966年10月『群像』に発表された「犬殺しの歌」というエッセイの中で、大江健三郎は「奇妙な仕事」を書く前に「犬殺しの歌」という〈詩のごときもの〉を書いたことを言及して

(8) 大江健三郎『死者の奢り』「後記」、文芸春秋新社、1958年3月。

いる。大江健三郎の友人である石井晴一の記憶と大江自身の記憶を合わせて分析すると、「犬殺しの歌」→「獣たちの声」→「奇妙な仕事」という順が想定できるようである<sup>(9)</sup>。この「犬殺しの歌」という〈詩のごときもの〉の中で、大江健三郎はゴシックで魯迅の一言（「大きな希望をふくんだ恐怖の悲鳴をあげて……」）を引用した<sup>(10)</sup>。黒古一夫氏による大江健三郎のこの頃の読書歴についての考証によると、パスカルの『冥想録』とE・A・コーエンの『強制収容所における人間行動』が、当時大江健三郎に大きなショックを与えた書物であるという。こうしてみると、抑留生活が適応の段階に入ると、抑留者が生死の鍵を握っていた親衛隊に対する敵意が喪失するというE・A・コーエンの観察から、大江健三郎は示唆され、日本人が次第に行動の意志を失ってしまうという危機を感じ、それを普遍化して、〈監禁状態〉を作り出したのではなかろうか。そして、「犬殺しの歌」にゴシックで魯迅の一言を引用することによって、魯迅が『呐喊』自序において「鉄の部屋」の中で昏睡している人々を呼び起こそうとしたと同様に、大江健三郎も危険の感覚を日本人に喚起しようとする意識を持っていたといえよう。その中には、明らかに啓蒙意識が潜んでいると考えられよう。

## 二 同時代への啓蒙と冒険

「ばくの戦争文学」というエッセイにおける初期作品について大江自身の分類に従い、「飼育」を、同じく戦争時代地方小学生の日常生活を描いた「芽むしり仔撃ち」と同類のものとしているのが普通である。ところが、〈監禁状態〉のテーマを背後で支える思念、さらに大江における「戦後」の意味を考える場合、このような考察法には些か満足できないところがある。大江の小説世界には常に「一

- 
- (9) 〈詩のごときもの〉の「犬殺しの歌」と脚本の前後に関して、石井晴一の言説と大江の回想の間にずれがある。石井の「処女作の頃」における記述によれば、犬の吠え声のことを大江に語ったのは、脚本完成後のことであって、その前ではない。さらに、石井は、「奇妙な仕事」を読んでから、「そこには僕たちの置かれた曖昧な腹立たしい状況がよりの確にとらえられ、そして僕を悩ましたあの犬のなき声が導入部と結末に巧みに使われていた」と評価した。そして石井が犬の吠え声について大江に語ったのは、「獣たちの声」には「犬たちの姿が充分鮮明に描かれていない」からであると。信憑性から見ると、石井の言説のほうが納得できると感じられる。つまり、大江健三郎の記憶に混乱があったと見てよいようである。
- (10) 大江健三郎は「大きな希望をふくんだ恐怖の悲鳴」という一言が魯迅の『野草』から引用したと記しているが、実はそうではなく、『呐喊』所収の「白光」という作品の中の一節であると筆者が発見。学習研究社1984年11月刊『魯迅全集2』（丸尾常喜訳）164頁参照。

作は次作を必然とし、後者は前者を必然とする」<sup>(11)</sup> という方法論にヒントを受け、そして、大江が〈監禁状態〉を時代の全体的状況そのものに対象化したことと考え合わせると、「飼育」は「人間の羊」と一緒に考える方がより適切であろう。

「飼育」は従来、戦争の悲惨を告発する明らかな「反戦文学」として受け取られている。しかし、読んでいくうちに、より普遍的で深い主題を持ったものであるように思われる。

「飼育」の前半では黒人兵が村人にとって「敵」から「飼い物」に転化する過程、後半では黒人兵と大人たちの二重の裏切りによって子供たちの神話的世界が崩壊される過程を描いた。黒人兵が〈父〉に殺され、〈僕〉が二日間の昏睡から目覚めてから、「僕はもう子供ではない」と思うようになったが、人間性の失われた大人たちへの同化を拒否している。従って、〈僕〉の覚醒は〈僕〉の自己意識の覚醒であり、人間性の覚醒であるといえる。洪水によって外部と遮断された村というのは、〈監禁状態〉のもう一種の形態として使われている。このような想像力によって構築された非現実的世界において、大江健三郎は、戦争という殺人行為の根底に横たわる人間の本質を剥ぎ出してみた。つまり、大江健三郎は、この作品に語られた自我の覚醒の中で、人間性の失われた「戦後」を引き受ける姿勢をみせたといっておかろう。

「人間の羊」もずっと占領下の日本人の屈辱感を描く作品として読まれてきたが、かつて黒人兵を〈飼育〉した傲慢な日本人が今度はアメリカ占領軍に〈羊〉に貶められるという設定、そして、日本人の多くがアメリカ軍の前では弱者であったが同胞の前ではいかにも強者のように振舞うという設定は意味深長である。これによって、戦争時代と戦後時代という二つの時代の状況を、人間を動物として扱うということを通じて浮上させた。両者に共通する強者と弱者との関係を大江健三郎は弱者の立場に立って描出した。〈監禁状態〉は大江の歴史記憶の中心的場所であることが、あらゆる日本人が監禁苦を嘗め、あらゆる日本の生命が尊厳を失うというのは大江早期文学の基本的語彙である。同じくアメリカ占領を主題にした小島信夫の「アメリカン・スクール」と野坂昭如の「アメリカひじき」と比べてみれば分かるように、大江健三郎は単なるアメリカ批判や日本の庶民が日本の首脳に裏切られたことを強調したのではなく、戦後日本人の生存の墮落、強権に

---

(11) 小笠原克「『個人的な体験』への道」、『国文学 解釈と鑑賞』、1969年9月号。

屈服しやすい日本人の国民性への不満ないし批判を表明したいのであろう。

「人間の羊」は社会体制内の存在として生きる日本人像を追求している。そのような生き方をやめたときにどうなるのかを、次作で追究するはずである。「人間の羊」以降の展開で、「占領下の日本」という問題意識はそれと二重構造のようにになっている。アメリカと日本の間の「支配——被支配」という関係を、大江は戦後派の人たちよりも強烈に感じ取っていたのであろう。一つの独立国家としての尊厳を守りながら、もう一度国家主義の道を歩むのをどのようにして避けるか。それはまた新しい課題となって、大江の前に現れてきた。

長篇処女作「芽むしり仔撃ち」はよく大人対少年という対立した図式で読み解かれている。確かに、小説は「夜更けに仲間の少年の二人が脱走したので、夜明けになっても僕らは出発しなかった」<sup>(12)</sup>という一文で始まってから、一貫して、仲間を<少年たち>や<子供ら>と表現して、村人たちである<彼ら>と対比しつつ、物語を進展させている。作品は一人の少年ではなく、<僕ら>少年たちの集団物語である。語り手の<僕>は<僕ら>という言葉で少年たち全体の感覚、思考を語ることが多い。しかし、自分と仲間たちとの間に距離を置く時があるし、他人に伝えたり、他人と共有したりすることのできない苦しみもある。特に、抗争を最後まで貫いたのは、ずっと連帯感を持った集団行動してきた<僕ら>ではなく<僕>一人だけであるということに、注意しなければならない。結びのところで、<僕>は村人に追われ、仲間の誰も「駆け込むだけの勇気を持ってはいしなかった」森の中へ駆け込む。<僕>はこの行動によって<僕>であることを堅持し続け、戦いを貫こうとする。<僕>を待ち受けているのは今よりもっと苛酷で不確かな未来であるにもかかわらず、現実には<僕>が獲得したのは戦いの勝利ではなく、限られた世界における一個人としての主体性にほかならなかった。

こうしてみると、大江健三郎は「芽むしり仔撃ち」において、<監禁状態>という時代状況の中でこそ、<羊>にされるという日本人の生存現状の下でこそ、<個人>としての主体性を唱えているのではないか。大江健三郎は、当時の日本人には、個人の主体性というものが最も欠けていてそして最も必要であるものと見て、小説を以って啓蒙しようとしているといってもいいだろう。

「芽むしり仔撃ち」とほぼ同じ時期に出版された第二の短編集『見る前に跳べ』

(12) 大江健三郎『大江健三郎全作品 I』、新潮社、1966年、P201。

の中で、「芽むしり仔撃ち」に現れてきた個人の主体性が完全に姿を消し、そこに露呈した青年の無力感が、大江早期創作の第一の段階を受け、またこの後の第二の段階を展開する。その後の「われらの時代」を代表とする一連の小説の中で、主人公たちは反常態的な姿で出現し、反社会的・反道徳的な行動を取る。つまり、この段階における大江健三郎の主題は明らかに変化した。大江本人と評論界の言い方を踏襲すれば、大江健三郎は<性>と<政治>という一対の概念を創作に導入し、それを重要な側面として人生・存在を把握しようとするということになる。真新しい角度から戦後の日本社会を認識しているため、この二分法は簡単すぎるにもかかわらず、大江健三郎の問題意識をはっきり浮上させたといえる。言い換えれば、大江健三郎はもっとも衝撃力のある<性>と<政治>を突破口にして、人々の注意を引き、「奇妙な仕事」や「人間の羊」に潜んでいたが、理解されなかったことを言い伝えようとするのである。

### 三 自己への啓蒙

大江健三郎の希望と裏腹に、「われらの時代」などの作品は評論家からも普通の読者からも激しい批判を被った。1960年5月、彼は第三次日本文学家代表団の最も若いメンバーとして、中国を訪問した。大江にとって最初の海外旅行において、<健全な中国>及び中国人が持っている独立した国家の国民としての誇りが大江健三郎に新鮮な刺激を与え、とりわけ中国文学と中国現実との緊密な繋がりが、大江健三郎の自分の文学についての反省を促し、文学の意義についての自信を回復させたようである。今度の中国訪問は直接に作品化はされていないが、真の独立と自主こそ誇りの源であることを明らかに示した「幸福なギリアク人」や、天皇制に自分の誇り・生きがいを求める右翼少年を描いた「セヴンティーン」・「政治少年死す」はその成果であると見なしているようである。

「セヴンティーン」の主人公<おれ>も劣勢に処する少年と設定されている。第二部「政治少年死す」において、この少年は右翼活動に参加することによってアイデンティティを確立し、優位性を獲得する。優越的地位・他者の排斥・他者への攻撃性が三位一体の構造として、この二部作品に表現されている。「尊皇」を第一義に掲げた右翼団体大日本愛国党に所属していた山口二矢による浅沼委員長刺殺事件を素材にした二部作を通して大江健三郎がいたいのは、単なる一人の

普通の少年が急進な右翼少年に転身した経緯ではなく、この事件の背後に見られる天皇崇拜思想の根強さと象徴天皇制の隠蔽であると思う。

丸山真男に指摘されたように、終戦後一見日本人の思想構造に根を下ろした民主主義思想や理念は、現実には日本人の行動の強力な原動力になっていないということがわかる。日本人は戦後民主主義体制の下でも、天皇制に支えられた超国家主義に惹きつけられている<sup>(13)</sup>。従って、「セヴンティーン」と「政治少年死す」は天皇制への否定を表明したものというより、むしろ民主主義思想がまだ徹底的に貫徹されていない戦後日本の現実状況への憂慮乃至批判を表明したものであると思う。大江健三郎は正に天皇制の優越性・排他性・攻撃性の実質についての解釈を通して、戦後日本の社会的状況を、天皇制と並存している民主主義の弱さ・脆さを、憂慮して訴えていることによって、啓蒙的意図を伝えようとしているといえよう。

1963年6月、大江健三郎の第四の短編集『性的人間』が刊行された。所収作品の反社会・反道徳的意味が一層増している。「性的人間」の主人公<J>は性的不能者の男であり、反政治的で、自己の失われたオルガスムのことだけを考え、完全に閉ざされた性的小世界を作ることができたら自己救済が可能かもしれないと夢見ている。その試みが失敗して、今度は逆に、自分の歪んだ内面を完全に他人たちの世界の中に露呈させる痴漢行為を取るようになった。エッセイ「われらの性的世界」において規定された<性的人間>という概念を比べてみると分かるように、この時の<性的人間>の内包は既に微妙な変化が生じている。それは自己と他者との区別を解消することを望んでいる存在を指すのではなく、性的衝動を以って自己と社会の決裂を表明する存在を指すようになった。「政治的人間よりも性的人間のほうが、より深く現実の核心にかかわっていることもある」<sup>(14)</sup>と大江自身が書き付けているが、痴漢のような反社会的行為をする人を描かなければ、社会とのつながりが表現できないのが問題になる。明らかであるように、大江健三郎は主題先行の落とし穴にはまったのだといえる。

より強烈な衝撃力を持っている方法を探すために冒険めいた試みをしたが、かえって大江は多くの評論家と読者に敬遠されてしまった。大西巨人や大原恒一

(13) 丸山真男『増補版 現代政治の思想と行動』、未来社、1969年5月。

(14) 初出未見、『厳肅な綱渡り』(文芸春秋社、1965年3月)所収、256頁。

らの反撥文<sup>(15)</sup>にみられる反応から見ると、その試みの実際的効果はあがらなかった。大江健三郎がエッセイ「犬殺しの歌」で「その混沌の気分の奥にあるものを実は誰も理解してくれない」と書かれたように、大江の啓蒙は実績が欠乏しているが、幸いながら、1963年の長男大江光の出生と大江の広島旅行が、認識論と方法論を調整する契機をもたらした。

1964年に発表された短篇「空の怪物アグイー」と長篇『個人的な体験』は、平野謙が『大江健三郎全作品』解説において両者を結び付けて<sup>(16)</sup>以来、比較しながら論じられるのが通例であった。両作品はほとんどすべての設定において逆向きであったが、最も注意すべきなのは、『個人的な体験』はこれから子供をどう扱うかを問題にしている物語であるのに対して、「空の怪物アグイー」は子供を死なせてしまった後発狂し自殺したことを語っているということである。一つの存在として生きている赤ん坊を（障害児であるとしても）勝手に抹消することから起こった「空の怪物アグイー」の主人公の＜D＞の罪意識は、『個人的な体験』の主人公の＜<sup>バード</sup>鳥＞が障害児を引き受ける精神的支えになるものであるように思われる。

『個人的な体験』は全13章のうち、12章の紙数を使って、＜鳥＞の猶予と彷徨、そして子供を殺す計画をしたことを描いたが、最後の章で＜鳥＞は子供を引き受ける決心をする。従来、『個人的な体験』は＜鳥＞が「正統的」な生き方を見出すまでの物語としてまとめられてきた。しかし、これでは、＜鳥＞の決断の唐突さが問題になる。作品を読んでいくうちに、中にありふれるような「自我」・「自己」という言葉遣いの多さに気付くようになる。これを＜鳥＞が決断する前に言った「それはぼく自身のためだ」という言葉を考え合わせれば、＜鳥＞はあくまでも自己に執着した人だ、彼が障害児を引き受ける行為も自己救済の願望から出発したのだ、という結論を下していいようである。『個人的な体験』とほぼ同時に書かれたエッセイ「飢え死にの子供の前で文学は有効であるのか」<sup>(17)</sup>において、大江健三郎は「いわゆる文学は、依然として個人の救済の試みである」と書いた。「個人救済の試み」というのは、大江健三郎が80年代に入ってから最大の主題である「魂の救済」の根幹・出発点となるもので、この時期における大江健三郎の文学の

(15) 大西巨人「大江健三郎先生作『われらの時代』の問題・その他」、大原恒一「大江健三郎氏への手紙——あなたは日本の青年男女をとらえきっているか」を指す。

(16) 『大江健三郎全作品6』（新潮社、1966年4月）「付録・解説」において、平野謙が初めて、二作品が双生児、あるいは表と裏、光と影のように深い関係にあることを指摘した。

(17) 大江健三郎『厳粛な綱渡り』所収、文芸春秋社、1965年、P222～223。

役割についての認識である。要するに、文学はより高いレベルで生活を観察することができるが、直接に社会を救助することはできない。しかし、文学は個人の不幸を乗り越えることによって自己救済を試みることができる。このようにして、大江は啓蒙の対象を自分自身に転化したのである。大江文学は『個人的な体験』によって成熟を見せたが、その成熟はまさに自己への凝視と自己への啓蒙によるのである。

#### 四 啓蒙から文化批評へ

この時期に、大江はまた大量のエッセイや評論を書いて、作品について解釈・説明し、或いは社会状況について見解を發表したりした。それは大江初期創作の主役ではないが、大江文学の、啓蒙性から文化批判性への傾斜がよくみられるものである。代表作として、『ヒロシマ・ノート』、『沖縄ノート』が挙げられるが、一般的には、大江の、文学をもって政治に参加するテキストだと思われる。しかし、「真の広島のなる人々」の「生活態度と考え方」<sup>(18)</sup>を表現するために、大江は「日本人」そのものの全面的検討を迫る地点に到達した。「日本人とはなにか、このような日本人ではないところの日本人へと自分をかえることはできないか」という「内部への問い」<sup>(19)</sup>によって、大江は批判の目で日本社会と日本人を見つめた。この時の大江は、とくに啓蒙者としての「優越性」を解消させ、自分を啓蒙の対象に入れただけではなく、文化批判の対象にも入れたのであろう。

1967年に刊行された『万延元年のフットボール』は、アイデンティティ、再生、障害児など多元的テーマに及んでいる。発表当初、主人公の蜜三郎と鷹四をそれぞれ傍観者と行動者と見なして対立させる図式がしばしば提起されている<sup>(20)</sup>。そして、大岡昇平、安岡章太郎、平野謙、渡辺広士らも文芸時評などで「不安の表現」、「新しい伝奇小説」、「現代神話」、「自己同一化の喪失と回復を狙った」<sup>(21)</sup>と

(18) 大江健三郎『ヒロシマ・ノート』、岩波書店、1965年、P2。

(19) 大江健三郎『沖縄ノート』、岩波書店、1970年、P2。

(20) 代表的なものとして、松原新一の「地獄と救済の呼応」(『大江健三郎論』、講談社、1967年)、大岡信の「文学は救済でありうるか」(『群像日本の作家23 大江健三郎』、小学館、1992年所収、初出『中央公論』1972年9月号未見)、伊豆利彦の「『万延元年のフットボール』」(『国文学 解釈と教材の研究 特集・江藤淳と大江健三郎』、1971年1月号)などがある。

(21) 詳しくは、佐々木基一・安岡章太郎・寺田透「創作合評」、『群像』1967年8月号；大岡昇平

評している。

物語全体の構造をなすものとして、「現在」の出来事である「スーパーマーケットの略奪」と「過去」の二つの出来事である「万延元年の一揆」と「朝鮮人部落襲撃」が挙げられる。この三つの出来事によって貫かれる百年をまたぐ〈歴史〉について、個々の登場人物がそれぞれの立場からそれぞれの発話によって異なる「解釈」や「記憶」を示している。さらに、〈歴史〉は〈複数の解釈や記憶〉の絡み合いによって語られているのである。

作品において、〈歴史〉は「現在」の出来事と関わってはじめて復活することができる。谷間のむらの百年間の〈歴史〉は「現在」の時間・空間でもう一度繰り返されているように蘇る。特に根所家という家系の「血脈」を整理してみると、「暴力的なもの」の血脈であることがわかる。『万延元年のフットボール』が提示した背景の中で考えれば、それが一つ特異的な〈歴史〉の中に位置づけられていることに、より一層注意が引かれるのである。

小説の設定と歴史事件との重なり（例えば1860年即ち万延元年の四国の一揆、対米不平等条約の調印と百年後即ち1960年の安保闘争；1945年特攻隊復員兵の朝鮮人部落への襲撃、鷹四の朝鮮人経営のスーパーへの強奪と1965年日韓条約の調印など）の角度から読んでみれば、この小説は実際、1967年前後の明治維新百年を讃美する風潮を的にしたのであると分かる。小説は百年間の歴史変化を赤い糸にしているが、大江健三郎は歴史そのものを書くのではなく、歴史の〈ズレのある繰り返し〉を通して、歴史に対する反省、批評、及び未来に対する展望を表出しようとするのである。

これによって、大江健三郎は啓蒙者から批評者に転身し、自分の文学が目指すものを歴史に対する反省・現行社会体制に潜んでいる危機に対する指摘に定めるようになった。要するに、探索の失敗や〈個人的な体験〉と広島経験の洗礼を経て、大江健三郎はこの時期において、やっと個人に対する執着と社会現実に対する注目を両立させるようになり、そして歴史の本質的な文脈に自分をつないで考えることによって、文化批評の役割を果たした。

60年代の日本社会は激変を経験した。その十年間の変化は、日本社会を支配してきた信仰、倫理及びイデオロギーを転覆し、日本人の精神的風土を侵食して

---

「文芸時評」、『朝日新聞』1967年6月28日；平野謙「文芸時評」、『毎日新聞』1967年6月28日；渡辺広士「文芸時評」、『新潮』1967年8月号などを参照。

いた。『万延元年のフットボール』は当時日本人の精神の深層に迫り、大きな質疑を惹起した——日本人はどのような方向へ自分の歴史を推進していくのか、現代日本人は何を根拠に生きていくのか、と。作品は深いレベルで民族の反省を促し、日本近代文化の決算をする意欲が見られよう。『万延元年のフットボール』に掘り出された〈歴史〉は大江に現実根を下ろす可能性をもたらしてくれた。その意味で、『万延元年のフットボール』は大江自身に「乗越え点」として位置づけられているが<sup>(22)</sup>、むしろ、大江文学の転換点、あるいは新たな起点として位置づけられるほうがより適切であろう。明治百年にあたる1967年に、それまでの二年間の沈黙を破った大江健三郎は、『万延元年のフットボール』という作品によって、戦後再啓蒙者から文化批評者への成長を遂げたといえるであろう。

## 終わりに

大江健三郎は現代日本で最も問題提起的な作家の一人である。人々は大江の文学的成就を強調する際、往々としてその思想啓蒙の価値を見落としている。大江健三郎は文学に携わった最初の時既に啓蒙的意識を持って創作し始め、病態社会における病態青年を取材の対象にすることによって病症を暴き出し、注意を引こうとした。小説と同時にエッセイにも励んでいるのも、同じく啓蒙意識の現れであるといえる。禁忌領域を突破することによってより衝撃力のある啓蒙を図ろうとする試みが挫折に遭った後、大江健三郎は視線を自分に落とし、自分自身に啓蒙を施した。このことによって、今まで啓蒙実績の欠乏（作品の真意を理解されなかったということ）という窮境から脱出する唯一の方法はいままでの自己を乗り越えることだと認識した。これは、彼が自分の文学に「社会批評」ないし「文明批評」の要素を注いだ所以であるといえよう。この意味で言えば、大江健三郎が日本戦後思想史においても一席を占めるといっても過言はないだろう。

一般的に言えば、啓蒙の目的は「救世」にあるにはかならない。大江健三郎の啓蒙テキストにおいても日本人の生存状態を問い詰め、日本人を覚醒させようとする「救世」的意味があるが、虚妄の絶望を引き受けることによって、個人救済つまり「救個」・「救人」を試み、その上「社会批評」をしていく大江式の啓蒙が成

(22) 大江健三郎は「若者から読者へ の乗越え点として」（講談社文芸文庫版『万延元年のフットボール』あとがき）、講談社、1988年。

し遂げられた。大江早期文学は挫折を経て成熟したが、その成熟は正に自己に対する凝視・啓蒙と社会現実・文明に対する批判との結合に示されている。こうであるからこそ、大江文学は相対的独立性を保ち、時代を表現すると共に時代との緊張関係を保つことができた。この点において、「文以載道」の伝統をもっている中国の作家たちに大きな示唆を提供することができると考えられよう。